

東京車検整備株式会社



YUI MIKI 油井 美紀

体育会・主将として

大学在学中はアイスホッケーに打ち込みました。シーズン中はほぼ毎日練習に明け暮れ、合宿先の日光では、鼻水が凍るほどの寒さの中で、厳しい練習を重ねたものです。女子部創部2年目だったその頃は定まったルールもなく、全員が手探りでチームを作っていく状況でした。そんな折、私が主将を務めることになったのです。

中でも苦労したのは、OBとのやり取りでした。アイスホッケーはお金がかかる競技で、部費だけではリンクを借りられません。そのためOBから寄付を募り、部活動の資金に充てていたのです。学生だった当時は目上の方と接する機会もなく、どう対応してよいのか分かりませんでした。特に体育会系は上下関係が厳しく、理不尽に感じた場面もありましたが、社会へ出る前に目上の方と交渉する機会を得られたのは、よい経験だったと思っています。

叱られるありがたさ

大学卒業後に入社したアサヒビール株式会社では、酒販店や卸問屋の営業を担当しました。ところが、右も左も分からない新人の私はミスばかり。当時、女性の営業職もまだ少なく、酒販店の社長に怒鳴られ、卸問屋の営業には嫌味を言われることも日常茶飯事でした。

記憶に残っているのは、私のミスで他部署に迷惑をかけてしまった、事務所内の大勢の前で、営業部長に大きな声で叱責されたこと。「申し訳ございませんー」と頭を下げ、ただただ平謝りするしかありませんでした。

その時はいたたまれない気持ちしかありませんでしたが、誰かに叱ってもらえる機会がほとんどなくなった今振り返ってみると、貴重な経験だったと思っています。

人を「叱る」には、非常にパワーが必要です。それは次に同じ失敗をしないようにという指導であり、期



▲会長との1枚。

待も込められています。どうしてもければ、上司は何も言わずに部下の評価を会社に報告すればいいだけで、それはお客様も同様です。「直してほしい」という要望があるから苦言を呈してくれるのではないのでしょうか。

私はたくさんの方に叱ってもらったおかげで、社会人として育てていただき、今は心から感謝しています。愛情のある「叱り」は、その時は分からなくても、後で必ず自分の成長につながります。

子育てしやすい社会へ

アサヒビール株式会社から転職し、ウェディングコーディネーター

を経て、東京車検整備に入社したのは2001年（平成13年）のこと。

それから2年後に子どもを出産しました。フルタイムで仕事をこなしながらの子育ては、休憩のないまさに長時間労働そのもの。体力、精神ともにキツイと感じることもありましたが、その一方で子育ては仕事を頭から切り離してくれる貴重な時間でもあります。子ども達は1歳前後から託児所、幼稚園では最後まで預かり保育、小学校では学童と、人にお世話になりっぱなしの子育てでしたが、そのおかげで地域の友達と人間関係も構築でき、ママ友やたくさんの方々に助けてもらいました。この経験から、誰かしら大人の目が届く中、つまり地域や社会の協力によって子育てできる環境を整えば、女性がもっと働きやすくなるのではないかと考えるようになったのです。

世の中が「社会全体で子どもを育てていく」くらいの寛容な発想があれば、「女性の社会進出」という表現も

必要なく、当たり前になるでしょう。そのような社会になれば、人手不足の中小企業へもよい影響を及ぼすと考えています。

人生修行をさせてくれたもの

趣味である極真空手は、43歳から次男と始めて2022年で10年目になります。地道に鍛錬を継続することで、努力が必ず身を結ぶ瞬間を体感できるところが面白いと思っています。もしかしたら、若干M体質なのかもしれません（笑）

趣味とは言えど、決して自分の思い描くように簡単には達成できないことの連続。努力の継続によって



▲2021年10月「小さい成功体験」

「小さい成功体験」や「失敗」の積み重ねを楽しみながら取り組む。これは子育てと全く同じで、「子育て・空手」は私にとってまさに「人生修行」をさせてくれたもの。この経験が仕事に役に立っていると思っています。

社員の皆さんへ

1975年（昭和50年）に油井ひろ子会長が創業した東京車検整備を引き継ぐことになり、身の引き締まる思いです。私は整備士の資格をもっていません。そんな人物が社長になり、不安を感じている方もいるでしょう。整備については素人でも、人生の経験値はあると思っています。今まで通り渡辺専務を筆頭に、会社の皆さんに支えてもらいながら、そして私自身も皆さんを支えられるよう、「会社をよりよく継続する」という考えを第一に邁進していきます。どうぞよろしく願います。